

米里山際古墳

養父市

# 米里山際古墳

—一般国道483号北近畿費同自動車道和田山八鹿道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

兵庫県文化財調査報告  
第440冊

兵庫県教育委員会

平成25(2013)年3月

兵庫県教育委員会

養父市

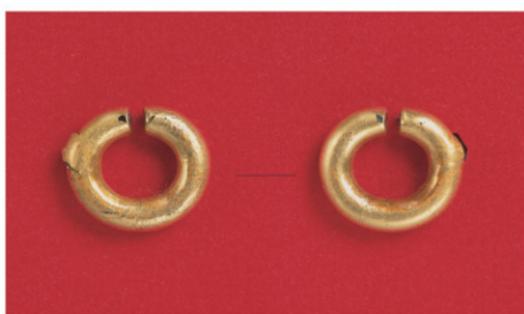
# 米里山際古墳

——一般国道483号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一

平成25(2013)年3月

兵庫県教育委員会





出土した土器と耳環（表裏）



## 例　　言

1. 本書は養父市八鹿町米里に所在する米里山際古墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は一般国道483号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道路建設に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所より平成19年3月23日付け国近整農二工第152号で依頼を受けて実施した。調査は兵庫県立考古博物館主査山上雅弘・主査池田征弘が担当した。
3. 発掘調査は本発掘調査（遺跡調査番号は2007109）が平成19年12月1日～20年3月14日の期間実施した。
4. 出土品の整理は、兵庫県教育委員会を調査主体として、平成23年度に兵庫県立考古博物館が平成24年度に公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部が実施した。
5. 調査の推移

（発掘調査）

確認調査

平成17年8月26日～9月21日

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

平成19年8月20日～9月14日

実施機関：兵庫県立考古博物館

本発掘調査

平成19年12月1日～平成20年3月14日

実施機関：兵庫県立考古博物館

工事請負：（株）安井工務店

（出土品整理事業）

平成23年6月1日～平成24年3月26日

実施機関：兵庫県立考古博物館

平成24年7月21日～平成25年3月26日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

6. 本書に使用した方位は国土地理院（第V系）の座標北を示す。また、標高は東京湾平均海面（T.P.）を基準とした。なお、座標系は世界測地系である。

7. 遺物は通し番号とし、本文・図版・写真図版とも共通のものとした。なお、金属製品については頭にMを冠して土器と区別した。土器は須恵器断面を黒塗り、土器を白抜きとした。

8. 本書に使用した地図は第6図が国土地理院「八鹿」1/25,000を使用した。

9. 本書の執筆は公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部山上雅弘が担当した。

10. 本書の作成にあたっては、編集を山上雅弘が佐伯純子の補助をえておこなった。

11. 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。

12. 発掘調査・整理作業にあたって、地元関係者を始め多くの方々・機関のご協力・ご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。（順不同、敬称略）

養父市教育委員会 谷本進・山根壬生子・西尾孝昌、豊岡市教育委員会 濱戸谷啓（当時）、潮崎誠



第1図 遺跡の位置

# 本 文 目 次

例言・凡例

目次

第1章 調査の経緯 .....	P 1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の体制	
第2章 地理的環境・歴史的環境 .....	P 3
第1節 地理的環境.....	P 3
第2節 歴史的環境.....	P 3
第3章 調査の成果 .....	P 7
第1節 古墳の調査.....	P 7
第2節 粘土採掘坑・水田.....	P 8
第4章 出土遺物 .....	P 9
第1節 古墳時代の土器.....	P 9
第2節 その他の時代の遺物.....	P 11
第3節 金属製品.....	P 11
第5章 まとめ .....	P 12

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置

第2図 調査前の道路遠景（西北から）

第3図 調査前の石室（北から）

第4図 石室の崩落状況（東から）

第5図 写真撮影風景（西から）

第6図 周辺の遺跡（1／25,000）

第7図 調査区位置図

## 表 目 次

表1 遺物観察表（1）

表2 遺物観察表（2）

## 巻頭図版

出土した土器と耳環

## 図版目次

図版1 調査区位置図

図版2 調査区全体図

図版3 墳丘平面図

図版4 石室平面図・立面図

図版5 石室断面図

図版6 石室遺物出土位置図

図版7 石室構築平面図

図版8 周濠断面図1

図版9 周濠断面図2

図版10 出土遺物1

図版11 出土遺物2

図版12 出土遺物3

## 写真図版目次

写真図版1 遺跡遠景

写真図版2 遺跡全景1

写真図版3 遺跡全景2

写真図版4 古墳全景

写真図版5 墳丘・周濠断面

写真図版6 天井石除去後

写真図版7 床面検出後

写真図版8 石室床面

写真図版9 石室内出土遺物

写真図版10 離床除去後

写真図版11 石室撤去後

写真図版12 前庭部・墳丘土留め

写真図版13 作業風景

写真図版14 天井石撤去作業状況

写真図版15 石室解体状況

写真図版16 出土遺物1

写真図版17 出土遺物2

写真図版18 出土遺物3

写真図版19 出土遺物4

写真図版20 出土遺物5

写真図版21 出土遺物6

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

調査地は一般国道483号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道路事業に伴い八鹿インターチェンジの建設が計画された範囲内に当たる。この事業地内には米里山古墳・米里遺跡B地点などの周知の遺跡が存在することから、事業の実施に先立ち兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所では平成15・17年度に分布調査、平成17・19年度に確認調査を実施した。この調査によって当該地には周知の遺跡である米里山古墳が存在することが判明した。これを受け国土交通省近畿地方整備局豊岡河川国道事務所より平成19年10月10日付け国近整豐二工第99号で依頼を受け、上記事務所において本発掘調査を実施した。

本発掘調査は調査期間が平成19年度に下記の内容で実施され多くの成果をみることができた。調査に際しては重機により表土を掘削し、その後人力により包含層の掘削及び遺構の検出がおこなった。検出された遺構については写真撮影、断面図、平面図などの記録を作成し、記録保存をはかった。このほか、調査区全体の測量のためにヘリコプターによる空中写真測量を実施している。

なお、2月16日（土）には地元、高柳・米里両地区を対象に地元説明会を開催し、参加者25名をえた。

### 【調査の概要】

遺跡調査番号2005112／期間：17. 8. 26～17. 9. 21／面積1000m<sup>2</sup> 確認調査

担当者：西口和彦・村上泰樹

遺跡調査番号2007075／期間：19. 8. 20～19. 9. 14／面積314m<sup>2</sup> 確認調査

担当者：別府洋二・池田征弘

遺跡調査番号2007109／期間：19. 12. 1～20. 3. 14／面積950m<sup>2</sup> 本発掘調査

担当者：山上雅弘・池田征弘

## 第2節 調査の体制

調査は兵庫県立考古博物館が実施した。確認調査を平成17・19年度、本発掘調査を平成19年度に実施した。

### 【現場調査の体制】（所属は調査当時）

・確認調査 埋蔵文化財調査部 調査第1班 主査 別府洋二・主査 池田征弘

・本発掘調査 埋蔵文化財調査部 調査第1班 主査 山上雅弘・主査 池田征弘

調査補助員 野村大作・山本亮二・現場事務員 中島由美・藤原由美

### 【整理作業の体制】

整理作業は平成23・24年度の2ヵ年にわたって実施し、平成24年度末に報告書を刊行した。平成23年度は鉄器処理・遺物実測・復元を実施し、平成24年度に写真撮影・レイアウト・製図を行い同年度末に報告書を刊行した。

平成23年度

接合 藤池かづさ・又江立子・宮野正子

鉄器処理 浜脇多規子・桂昭子

実測 島田留里・柏木明子・久保夏美・佐伯純子・栗原美緒

復元 島村順子・藤池かづさ・上田沙耶香

平成24年度

遺構図（デジタル作業） 古谷章子

遺構図（トレースほか） 佐伯純子



第2図 調査前の遺跡遠景（西から）



第3図 調査前の石室（北東から）



第4図 石室の崩落状況（東から）



第5図 写真撮影風景（西から）

## 第2章 地理的環境・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

遺跡の所在する養父市は兵庫県の北部、但馬地方のはば中央に位置し、東西18.05km、南北8.5km、面積7798m<sup>2</sup>の広がりを持つ。地理的には東西方向に伸びる町で、北側は豊岡市、南側は朝来市に接する。市域の西側は県下最高峰である氷ノ山（1510m）が聳え、これに源を発する八木川は東流して市域中心部である八鹿に向かって下る。この川は流域の延長28kmを測り、円山川に合流するが、その間には細長い大規模な開析谷を形成し、下流付近では発達した河岸段丘を形成する。遺跡の周辺もこの段丘地形が発達しており、米里山古墳は河岸段丘と背後の大徳山北麓の北斜面との傾斜変換点に位置する。

### 第2節 歴史的環境

ここでは遺跡の立地する南但馬を中心に記述する。旧石器時代は資料が少ないが、15000年前と推定される八木山田遺跡で縄文土器に交じてサスカイト製の横長削片、メノウ製と凝灰岩製の縱長削片、鉄石英片の削片などが発見されたといわれている。

縄文時代は氷ノ山山系や神鍋高原などの山岳地帯を中心に遺跡が分布する。養父町の熊野遺跡では早期から前期の遺物が出土し、日高町の神鍋遺跡では、早期以降の各時期の遺物が採取され、前期の堅穴住居が検出されている。縄文時代後期から晩期になると、河川の沖積地や山地の縁辺部にも生活の拠点が進出してくるとされ、関宮町小路塙オノ本遺跡では後期の堅穴住居跡が検出されている。日高町の林布ヶ森遺跡や和田山町の高瀬遺跡では、河川に沿った低地に遺跡が立地する。この他、和田山町の筒江片引遺跡からは晩期後半の深鉢形土器が出土している。

弥生時代の集落跡は、和田山町の筒江片引遺跡、八鹿町の東家ノ上遺跡、赤尾遺跡、関宮町の前川向遺跡、門口遺跡、養父町の犬野遺跡、広瀬遺跡が知られている。東家ノ上遺跡と赤尾遺跡は尾根上に立てて周間に溝を巡らせた高地性集落の性格を持つ遺跡である。

墳墓は八鹿町の米里遺跡で中期の円形周溝墓が、八木西宮遺跡で方形周溝墓が確認されている。このほか、八鹿町内では沖田古墳・東家の上古墳群、小山古墳群、中山古墳群、国木とが山古墳群が築かれている。このうち、西家の上3号墳からは内行花文鏡が出土しており、4世紀後半と考えられている。また、小山3号墳第4主体部および源氏山1号墳第7主体部からは国内でも数例の出土例しかない石櫛を作った土器棺墓が知られている。上山古墳は八木川流域で唯一の前方後円墳であり、八木川・小佐川流域一帯の盟主墳とされている。

後期になると和田山町の加都車塚、王塚、山東町の森向山古墳、養父町の觀音塚古墳などがあるが、八鹿町では珠文鏡が出土した源氏山4号墳が築かれる。さらに後期後半になると、八鹿町では箕谷古墳群や西家の上古墳群で横穴式石室が築かれる。八木川の右岸では米里古墳群や高柳向山・下向古墳群が知られている。養父町の大蔵古墳群では单龍環頭太刀が出土しており、八鹿町の箕谷古墳群もこの時期のもので、このうち2号墳では「戊辰年五年」銘の太刀が出土したことによく知られている。

これらのことを見ると八鹿町内の古墳の分布は、古墳時代の全期間を通して八木川左岸の南東斜面に

集中しており、右岸側は比較的少ない。また、北側の小佐川流域でも分布数は少ないと考えられている。

南但馬では古墳時代の集落遺跡は非常に限られるが、近年の調査では山東町城の成果が著しい。柿坪遺跡から約120棟の堅穴住居や24棟の掘立柱建物、水田跡が検出されている。中でも4面庇付の建物や屋内に棟持ち柱を持つ建物で構成されており、政治や祭祀に関わる特別な空間として利用されたと考えられる。さらに、和田山町の加都遺跡からも100棟以上の堅穴住居が検出されている。周辺は円山川・与布土川、榮川、栗鹿川の流域に位置しており、早くから安定した平野が広がっているため集落の発達も顕著であると考えられている。

これに比して養父市域では旧八鹿町城を中心と可耕地が広がるが、全体的に狭小であったせいか、現在のところ大規模な集落形成は確認されていない。遺跡周辺では八木川に隣接する場所より小山・国木などの集落が立地する段丘上に存在した可能性が高いだろう。この意味では今回の米里山際古墳の成果は当該地域の集落を考える上では貴重な成果となった。

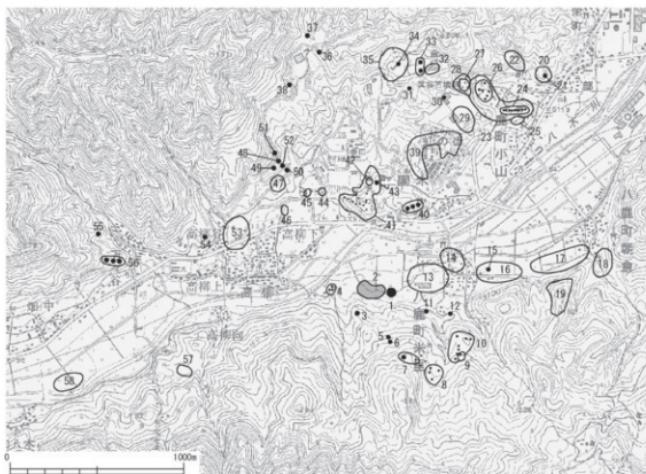
但馬における生産遺跡は須恵器の窯跡である鬼神谷1号窯が5世紀末に操業されたのが初現である。さらに和田山町の岡田窯跡、朝来町の松谷窯跡などは6世紀後半に操業されており、豊岡市の三宅瓦窯は7世紀後半の操業で、須恵器窯跡が検出されている。今回、本遺跡では5・6区において多数の粘土採掘坑を検出したが、これらの採掘坑から採取された粘土は状況からすると焼物生産のためのものである可能性も想定される。

八鹿町内の古代の遺跡としては、朝倉遺跡から奈良～平安時代前半にかけての溝が検出されており、出土した遺物の量から付近に集落が存在したことが窺える。東家ノ上遺跡からは平安時代の掘立柱建物と礎石建物跡、溝が検出されており、石帶と共に「昔」の墨書きがある須恵器碗が出土している。

このほか、八鹿町内には古代山陰道が東西に通過していた。推定コースは遠坂峠より栗鹿に入り、北西に進んで現在の和田山市街を通過して、養父市場を抜け、養父市上野から広谷を通り八鹿町朝倉に抜け、そこから八木川沿いに西に向かって関宮町を通るとされている。つまり、現在の国道9号線がこの道筋をほぼ踏襲するといわれる。周辺では山陰道に関わって八木・殿町遺跡が養着駅家に比定され、同遺跡からは8世紀頃の土器と共に石帶が出土している。さらに、栗鹿駅家と養着駅家の間には群部駅家があったとされるが、その推定地は上野もしくは広谷に比定されている。また、この山陰道は遺跡周辺では北東の一ノ宮神社との間を抜けて、遺跡の段丘崖下を通過するとされている。

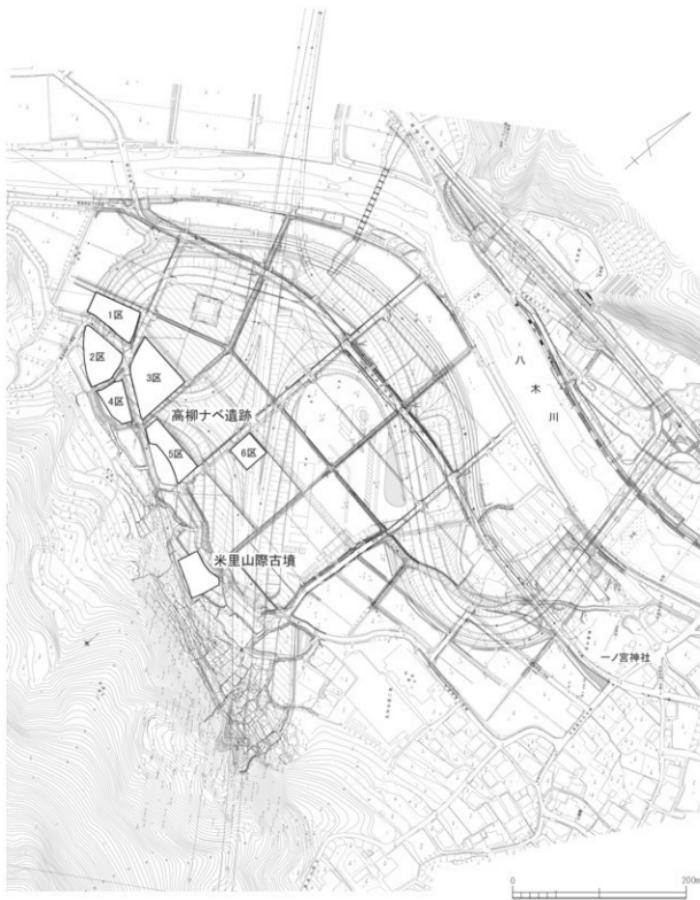
#### 【参考文献】

- 八鹿町1971「八鹿町史」  
養父市1990「養父町史第一巻通史上巻」



- |                 |                 |                |                |
|-----------------|-----------------|----------------|----------------|
| 1. 米里山断古墳       | 2. 高柳ナベ遺跡       | 3. 高柳向山4号墳     | 4. 高柳向山1号墳～3号墳 |
| 5. 下向1号墳        | 6. 下向2号墳        | 7. 三ツ尾5号墳～9号墳  | 8. 三ツ尾1号墳～4号墳  |
| 9. 米里窓跡         | 10. 米里1号墳～8号墳   | 11. 三ツ尾10号墳    | 12. 米里9号墳      |
| 13. 米里道路B地点     | 14. 一の宮神社散布地    | 15. 米里円形周溝墓    | 16. 米里道路A地点    |
| 17. 朝倉西台遺跡      | 18. 朝倉土器散布地     | 19. 朝倉城跡       | 20. 一部城跡       |
| 21. 一部古墳        | 22. 豊楽寺裏1号墳～3号墳 | 23. 東家の上遺跡     | 24. 小山1号墳～9号墳  |
| 25. 小山土器散布地     | 26. 東家の上1号墳～6号墳 | 27. 箕谷遺跡       | 28. 箕谷古墳群      |
| 29. 赤尾遺跡        | 30. 箕谷1号墳       | 31. 赤尾古墳       | 32. 西家ノ上遺跡     |
| 33. 西家ノ上1号墳・2号墳 | 34. 大田和古墳       | 35. 大田和遺跡      | 36. とが山1号窓     |
| 37. 茶堂古墳        | 38. とが山2号窓      | 39. 中山1号墳～24号墳 | 40. 上山1号墳～3号墳  |
| 41. とが山1号墳～16号墳 | 42. とが山寺院跡      | 43. 上山古墳       | 44. とが山土器散布地   |
| 45. 高柳野原遺跡      | 46. 高柳数田道路      | 47. 数田北道路      | 48. 七面山1号墳     |
| 49. 七面山2号墳      | 50. 七面山3号墳      | 51. 七面山4号墳     | 52. 七面山5号墳     |
| 53. 高柳石巒散布地     | 54. 将軍塚1号墳・2号墳  | 55. 願成寺旧跡      | 56. 万々谷1号墳～3号墳 |
| 57. 上向土器散布地     | 58. 下垣内遺跡       |                |                |

第6図 周辺の遺跡 (1/25,000)



第7図 調査区位置図

## 第3章 調査の成果

### 第1節 古墳の調査

#### 1. はじめに

米里山郡古墳の周辺は圃場整備によって墳丘が水田面に埋没し、石室北側の側壁が水田の法面の石垣として露出するなど、かなり改変されていた。つまり、古墳は水田の開墾によって南側2/3が埋没し、北側の1/3が完全に削平された状態で、墳丘上半も大部分は水田造成に伴って削平され、天井石より上は残されていない。

#### 2. 墳丘・周濠（図版2・3・8・9・写真図版2～7）

米里山郡古墳の構造は横穴式石室をもつ円墳である。墳丘の遺存状態が悪いため、規模の正確性を期したいが、残された墳丘からすると直径は14m前後と推定される。ただし、墳形からすると石室の長軸方向である東西方向が長く、南北方向にやや小規模で、少し楕円形に近い墳形を持つと推定される。

周濠は墳丘の南側および東西方向の3方に残されていた。ただし、北側の状況は不明である。墳丘が東西に長い楕円形を呈するため、周濠もこれに沿った形状となる。また、幅は南側で3m、東西側で2m前後である。背後の丘陵斜面を掘削して構築するが周濠底は南西側が最も高く、東西側に急速に深くなる。ただ、周濠はいたるところで円形ないし不規則な後世の擾乱が認められるため、本来の規模や構造がやや不明確になっている。特に、南東側周辺は周濠底から墳丘外側の肩にかけて形状の変形が著しい。

石室は東側に開口部をもち、前面にやや平坦な前庭部をもつ。墳丘の盛土は地山土とクロボク土を互層に盛土する。天井石周囲にやや不規則ではあるが、石列が認められたほか、墳丘内にも断続的な列石状が認められ、盛土保護のための造成痕跡が確認された。

#### 3. 石室（図版3～7、写真図版8～11）

石室内部には多くの遺物が出土した。ただし、土器は主として石室の南側に集中する。奥壁側では南隅で須恵器壺16と杯蓋15、杯身12。奥壁から2石目では土師器杯26・27、須恵器杯身9、杯蓋4・5、同じく3～4石目では須恵器杯蓋2・7・杯身11、5石目では須恵器杯蓋8・杯身10、漢道部では土師器杯24・25、須恵器杯身13・14、杯蓋1・6などがそれまとまって出土している。これに対して開口部付近では須恵器高杯20、壺17・広口壺18、甌19、平盤21・22など主として杯以外の器種がまとまって出土している。金属製品は石室内部から出土するが、床面の中央付近から北側に多い傾向が認められる。

石室は圃場整備に伴う造成によって圧迫を受けた影響で、天井石から側壁まで北側に崩落しない横ずれした状態で検出された。特に石室中央部が大きく北側にずれており、南側壁の奥壁側から3・4石目では基底石も石室内に傾いた状態であった。このため石室調査は基底石の上までの側壁石材を除去後に作業を進めなければならなかった。

石室内法は長さ8.8m、幅は奥壁近くで1.7m、漢道付近で1.4mである。古墳の玄室と漢道との境は明確ではないが、南側壁の石材が北側に大きく崩れるあたりが、両者の境と考えられる。これに従えば玄室の長さが5.3m、漢道部が3.5mとなる。さらに、石室の平面プランから見ると左側壁（北側）がやや胸張りとなり、南側壁では奥壁より5石目の石材までが大型のものであるが、開口部側は小型のものに

なる。北側壁の胴張りもこれに対応しており、開口部側は直線となる。玄室と浜道とは意識されているといえる。床面から天井石までの高さは奥壁で1.3m前後で、開口部付近で0.9mである。

#### 4. 床面（図版6、写真図版8・9）

床には襖床が敷かれる。石材は角礫が多く、拳大より大きめのものが用いられ、大きいものでは20cm前後と大型の石材を用いている。さらに襖床間の目地詰めの一部には5~10cm程度の円礫が用いられている。襖床下は基本的には黄色シルト層の地山で、削平されているが、中ほどより東側が傾斜し、前庭部が低くなるように構築されている。さらにこの傾斜地形に沿って石室内には素掘りの排水溝が設けられていた。

#### 5 石室の構築（図版4・5、写真図版10~12・14・15）

石室は全体が北側に押されて崩れた状態で、天井石や側壁は崩落ないししづれた状態で検出された。天井石は5石が残されていたが、奥壁側と浜道部上の2石を欠いた状態で、欠落した石材のうち浜道部上の1石は石室内部に転落していた。前述のように天井石の撤去にはラフターケーレンを用いたが、このケーレンによる計測では天井石は0.8~1.5tの重量が確認された。

側壁の石材は長さ2m前後の大型のものから、1m前後のものまで見られる。基本的に横位置にして積み上げ、玄室側にやや大型のものを用いる傾向がみられた。ただ、南側の側壁は中程が大きく内側に崩れ、上段の石材が内部に落ち込んでいた。基底石の据付けは地山を浅く掘り窪め、石材を自立させて据える。基本的に長辺を前面に出し、短辺を縱位置に据え、控えは比較的浅い。（ただし、南側壁の奥壁から5石目のように控えの深いものも例外的に見られる。）また、石材の据え付けには必要に応じて、安定や重心の関係から小礫をさむことが多いが、本墳ではこの礫は比較的少ない。2段目以降の石材は比較的方形のものを用いるが、長辺を控えするものはやはり少ない。

側壁は南側が2段~3段であるが、側壁の積み上げ段数は奥壁側に大規模な石材が使用され、段数が少なくなる。奥壁は幅1.4m、幅1.2m、厚さ30mの板石を用いる。長軸を縱方向に用い、1枚で奥壁の大半を覆う。側壁との境は小礫で馬詰めを行い、天井石との間には方形の石材を積んで覆っていた。

天井石は天井部分が平面となる石材を用いるが、基本的には不定形の巨石を用いている。崩壊が著しいため天井部を構築したものは4石であったが、石室内部に転落した1石も含め全部で6~7石で構成されたものと考えられる。

なお、視覚的な観察では石室の石材は襖床を含め、大半が周辺の山岳斜面で採取される蛇紋岩に共通する特徴を持つ。さらに、石材個々に特徴的な加工痕が認められないことからすると、露頭石材を無加工で石室の構築に使用したと考えられる。

## 第2節 粘土採掘坑・水田（図版3、写真図版2）

周濠は埴丘南側を半円形に巡る形で検出されたが、周濠上層からは水田土壤が検出され、この層からは中世須恵器が検出された。このため古墳周辺では中世前後に水田開発が行われていたと考えられる。さらにその下層からは直径1~2m前後の土坑状の掘り込みが多数認められた。これらは高柳ナベ遺跡の粘土採掘坑に共通するものであるが、この擾乱によって埴丘は大きく改変を受けている。粘土採掘坑の年代は不明であるが、中世水田が開墾される以前に粘土採掘が行われていたものと推定される。

## 第4章 出土遺物

### 第1節 古墳時代の土器

石室から須恵器杯身・杯蓋・甌・壺・土師器杯・壺などの土器や、耳環・鉄釘・刀子・釘などの金属製品が出土した。この他、前庭部からは須恵器杯身・杯蓋・壺のはか、奈良時代の須恵器蓋が出土した。このほか、周濠上層からは中世の須恵器甌・土師器甌などが出土している。

#### 1. 石室内部

遺物は床面からのものであるが、金属製品などの小型のものは礎床の間から出土している。

須恵器（図版10、写真図版16・17・19・20）

杯蓋（1～8）8個体を図示した。身との区別がつかない器種であるが、天井部に自然釉が掛かる、口縁端に重ね焼きの剥離痕跡が見られるなどを根拠に蓋とした。法量は口径10.2～12.3cm、器高32～45cmである。基本的に天井部を回転糸切りによって切り離すが未調整のままで、口縁部は丸く見える。3・5は天井部と口縁部の境が若干折れるが、その他の個体は境が不明瞭である。なお、石室内部から出土した蓋はすべてかえりをもたない。

杯身（9～14）6個体を図示した。法量は口径10.5～11.8cm、器高3.75～5.1cmである。これらの個体もかえりをもつものはない。底部は回転糸切り手法で切り離した後、若干のナデ調整を施すものもあるが未調整のものが多い。口縁部は端部を尖らせぎみにするものと、丸く見えるものがある。また、10は口縁端部を内側に折り、14はくの字形に外反させるなど特徴的である。底体部の境は丸く見えるものが多いが、11は特に糸切り痕跡を顯著に残し、ナデ調整をほどこさないため底体部の境が明瞭となる。14では内面に銳利な工具で線刻を施していた。図像を描いたものか単なる調整の痕跡なのかは明確ではない。

壺蓋（15）16の短頸壺とセットで出土した個体である。口径10.85cm、器高5.1cmを測る。

短頸壺（16）口径5.6cm、器高7.4cmで部体上半から斜めに立ち上がる肩部をもち、やや外反気味の短い口縁部を持つ。

小壺（17）口径6.25cm、器高6.85cmの小型の製品である。胴部が球形に近い形態で、くの字に短く外反する口縁部を持つ。底部は粗く回転ヘラ削りを施す。このほか、底部にヘラ記号が観察される。

広口壺（18）胴部上半に最大径をもち短い口縁部を内傾気味に立ち上げる。底部は回転ヘラ削りし、内外面を回転ナデ調整する。

甌（19）ラッパ状に開く口縁部と肩部に1カ所の穿孔をもつ。頭部に2条と胴部に1条の凹線が観察される。底部は不定方向の回転ヘラ削り調整を施す。

高杯（20）無蓋の高杯で口縁部のみの破片である。

平瓶（21・22）21は口縁部のみの破片である。22は頭部と肩～胴部の一部が残される個体で、肩部に退化してボタン状になった取手を貼り付ける。体部にカキ目が観察される。

土師器（図版10、写真図版18・20）

杯身（23～27）5個体を図示した。内面に暗文を施し、外面にはミガキ調整を施す。どちらも施文は密なもので器面も平滑に調整される。23は外面にケズリ調整に近い密な器面ミガキを施し、内面は緩方

向の細かいミガキが観察される。底部は丸底で体部との境が明瞭にならない個体である。24・25は外面に横方向の密なミガキ調整を施し、口縁部内外面を横ナデ調整する。内面についても密なミガキ調整を施した後、放射状の暗文を施す。26・27は外面をナデ調整するが、ミガキ調整を省略している。内面のミガキ調整もやや粗く、暗文も底部および体部下半に限定される。また、底部についても底体部の境がやや明瞭となる。23～25に比べると調整がやや省略されたものである。

甕（28）口縁部をくの字に外反させ、体部をやや長胴にする。外面に縱方向、底部を不定方向のハケ目調整、内面はケズリ調整を施す。

## 2. 石室開口部（図版10、写真図版19）

石室の襖床が途切れた付近にまとめて出土した遺物群である。須恵器杯身・蓋、土師器壺などがある。

### 須恵器

杯蓋（29）29は口縁部がやや内傾した個体で、天井部と口縁部の境をくの字に折る。天井部は回転ヘラ切り後未調整で、切り離しの痕跡が明瞭に残される。

杯身（30・31）口縁部にかえりをもつ個体で、底部は切り離し後、未調整である。いずれも小型の個体で体部は直線的で、内傾する小さなかえりをもつ。

### 土師器

壺（32）壺の底部片である。平底で底体部の境が明瞭な個体である。

## 3. 前庭部（図版11、写真図版19・20）

古墳前庭部周辺から出土した土器は、水田縁部の石垣裏込めや周濠の周辺などにも広がっていたが、大半が上層搅乱土からの出土で原位置を保ったものはほとんどない。唯一前庭部の検出面で出土したものは須恵器甕43・44の一例のみである。ただし、搅乱土からの出土とはいえ古墳時代の遺物は前庭部付近に存在したものと推測され、石室からの掻き出しや前庭部における儀礼に伴う遺物と推測される。なお、出土遺物はすべて須恵器である。

杯蓋（33～36）天井部が丸く口縁部との境が不明瞭なものである。口縁部は尖り気味のものも含まれるが基本的には丸くおえている。

杯身（37～39）いずれも径が小さいもので内傾する小型のかえりをもつ。底部は回転ヘラ切の後、未調整である。体部は斜め上方向に広がり直線的なプロボーションをもつ。

高杯（40）小型の個体である。ハの字に聞く脚部をもち、杯部は底部を広く貼り付けし、ナデ調整で仕上げる。

壺（41）底部片で、丸底で底部を回転ヘラ切り後、ナデ調整する。

甕（42～44）42は口縁部の破片である。口縁部外面に面をもつ個体である。体部外面には平行タタキの痕跡が僅かに観察されるが、基本的にはナデ調整によって消されている。

43は口縁部を欠損する個体で、肩部に最大径をもつ。外面は縱方向の平行タタキを施したのに、体部の上半に横方向のカキ目を施す。内面には同心円の当て具痕跡が顯著に観察される。

44は図上で唯一完形に復元できた個体である。内外面の調整は43とはほぼ同一である。口縁部は頭部からくの字に立ち上がり外面上方に面をもつ。

## 第2節 その他の時代の遺物（図版II、写真図版20）

古墳時代以外の時代の遺物も少量であるが出土している。出土したものには奈良時代の須恵器蓋・土師器壺・鍋、中世の須恵器椀・土師器椀などがある。ただし、中世の須恵器椀・皿については細片のため図化していない。奈良時代の遺物については古墳開口部周辺からの出土であるが、上層の搅乱からのものである。中世の遺物は周濠上層の水田層などからのものである。

須恵器蓋（48・49）この2点は奈良時代のものである。後碗もしくは大型の杯の蓋と思われる。天井部を欠損するためつまみの状況は不明である。口縁部を屈曲させて端部を折る。内外面をナデ調整で平滑に仕上げている。

土師器椀（50～52）3点ともベタ高台が残る個体で、水挽き痕跡が顕著に残る製品である。底部は回転糸切りで切り離している。12世紀代のものである。

土師器壺（45・46）口縁部をくの字に外反させる個体で、端部をやや尖らせておえる。胴部は球形になると思われるが詳細は不明である。内外面にハケ目が観察される。時期的には古代のものと思われる。

土師器鍋（47）口縁部を外反させ大きく体部が開く個体である。内外面にハケ目の痕跡が顕著に観察される。奈良時代～平安時代初めのものである。

## 第3節 金属製品（図版I2、写真図版21）

金属製品はすべて石室床面から出土したもので、耳環・鉄鎌・刀子・釘・不明品がある。すべて古墳に伴うものと判断される。ただし、完存するものが少なく、かつ原位置に留まったものも少ないと考えられる。

耳環（M1）奥壁近くで1点が出土した。部分的に破損が認められるがほぼ完形である。自身の形態で、銅芯金貼り技法で製作されている。法量は縦3.0cm、横3.35cm、太さ0.8cmで、断面形は円形である。

鉄鎌（M2～7）M2は柳葉の鎌身で、逆刺が幅広となり外反は僅かである。M4は長頭鎌と思われるが、鎌身の大半を欠損するため詳細は不明である。ただし、部分的に木質部が残存する。M3・5・7は長頭鎌であるが、いずれも茎を欠損する。

釘（M8～10）釘は3点出土した。この地域での釘出土例としては貴重なものである。ただし、完存するのはM8のみで、M9は下部を、M10は頭部を欠損する。M8は頭部を折り、端部を平たくする。断面は方形で軸幅は7mmを測る。

刀子（M11～M15）刀子は5点出土した。M11は刀部の先端を欠ぐる刀部の周辺や柄の一部に木質を残す。M12～14は茎部分のみが残存するもので、刀部を欠く。M15についても一方に刃を持つことから、刀子の一部と思われる。

不明鉄製品（M16）鉄の小片であるが、用途不明品である。

## 第5章　まとめ

米里山際古墳（以下、山際古墳）の隣接地に古墳は立地しないが、大徳山の北斜面には多くの古墳の存在が知られている。高柳ナベ遺跡（以下、ナベ遺跡）の西側には高柳向山1～3号墳、山際古墳南側で大徳山から下る尾根上には高柳向山4号墳、下向1・2号墳、三ツ尾1～9号墳がある。従って、山際古墳は本来これらの古墳の1基と考えられ、群集墳を構成した可能性がある。一方、今回の調査で墳丘周辺は開田化のために大きく地形変更を受けていることが明らかになった。このため、現在は埋没したものや、削平によって失われた古墳が周辺には多数存在した可能性も残される。

また、立地からすると西側に隣接するナベ遺跡は、本墳および周辺古墳の被葬者の集落であった可能性が高い。

本墳出土の遺物には須恵器、土師器、金属製品などがある。これらの遺物のうちでは須恵器杯身が特徴的である。この杯身にはかえりを持つものと、持たないものがあるが、かえりを持つものは石室開口部や前庭部のみで出土しており、石室から抜き出された遺物である。一方、杯蓋の天井部にはつまみをもつ個体が多く、杯身には高台を持つものが含まれない。さらに杯身・蓋に共通する点では直径が10～12cm前後で大型のものがない。そして、体部が総じて直線的で底部の切り離しが難であり、切り離し後は未調整のものが多い点などがあげられる。さらに共伴する罐・平瓶なども退化した形式のもので占められる。これらの諸特徴からみると本墳の出土遺物は陶色編年のTK217型式に該当するものと考えられ、時期的には7世紀前半頃と判断される。

ただし、石室外に抜き出された遺物にのみかえりを持つ杯身が含まれることを見ると、7世紀前半の中で時間的な経過を考慮しなければならない可能性がある。具体的な時間幅については検討をするが、いずれにしても本墳は7世紀前半に構築され中頃以前に最終埋葬を終えたものと考えられる。

このほか古墳の周辺では中世以前に粘土採掘坑が多數掘削され、シルト質の粘土を採取していたことが明らかとなった。この点に関しては隣接するナベ遺跡においても5・6区で同様の状況が観察された。遺跡周辺では米里窯跡が東約700mの丘陵上に見つかっており、粘土採掘坑の分布状況からすると、さらなる窯業生産地の存在が推測される。

表1 遺物觀察表(1)

土器

No	遺物	種別	形様	汎量(cm)			現存	備考
				口径	脚高	厚径		
1	石室床面	縦漉器	杯垂	10.2	3.2	5.5	3/4	完
2	石室床面	縦漉器	杯垂	10.15	4.8	6.82	ほぼ定形	ほぼ定形
3	石室床面	縦漉器	杯垂	10.25	3.8	5.45	ほぼ定形	ほぼ定形
4	前庭部	縦漉器	杯垂	10.9	4.1	-	ほぼ定形	
5	石室床面	縦漉器	杯垂	(11.1)	3.9	(6.0)	1/2強欠	
6	石室床面	縦漉器	杯垂	11.5	6.0	-	一部欠損	
7	石室床面	縦漉器	杯垂	11.5	4.5	6.0	-	定形
8	石室床面	縦漉器	杯垂	12.3	4.5	-	定形	定形
9	石室床面	縦漉器	杯身	10.5	3.6	6.1	1.8欠	
10	石室床面	縦漉器	杯身	10.5	3.9	-	定形	定形
11	石室床面	縦漉器	杯身	10.85	3.75	5.5	ほぼ定形	
12	石室床面	縦漉器	杯身	10.65	5.1	7.78	1.6欠	
13	石室床面	縦漉器	杯身	11.6	3.7	-	1/4欠	
14	石室床面	縦漉器	杯身	11.8	4.2	-	ほぼ定形	ほぼ定形
15	石室床面	縦漉器	垂	8.03	3.24	-	ほぼ定形	ほぼ定形
16	石室床面	縦漉器	垂	5.6	7.4	-	完存	
17	石室床面	縦漉器	小口	6.25	6.85	丸底	定形	
18	石室床面	縦漉器	正口垂	10.95	6.5	10.48	若干欠	
19	石室床面	縦漉器	縫	-	(3.45)	4.9	縫部1/2欠	ラバ口以開く縫部縫に小さな穴をもつ、縫部に2条と網部に1条の凹溝をもつ。既存は一定方向へのへき割り。
20	石室床面	縦漉器	正口	(11.0)	4.2	-	若干	横ののみの縫合である。外表面を横ナタ調整する。
21	石室床面	縦漉器	平底	6.8	4.8	(1)のみ	縫部の内側の片である。内表面を縫合ナタ調査する。	
22	石室床面	縦漉器	平底	-	(15.7)	-	縫部1/2欠	縫部が最も大きくなる方向へ縫合する。縫合部から底部に斜板とラブ型で、外表面を縫合ナタ調整。
23	石室床面	上細器	杯身	11.5	4.7	-	1/3欠	縫合部で底面を縫合する部分で、縫合部の下に縫合部を持つ部に逆さした状態で貼付。網部は1号目調査。
24	石室床面	上細器	杯身	11.6	4.3	-	ほぼ定形	丸底で外側を縫合へし縫合方向は基本とするベラ側り、内面をナタ調査後、文部の1号ガタ調査、既存は1号目調査。
25	石室床面	上細器	杯身	11.6	4.6	-	3/4	3/4
26	石室床面	上細器	杯身	12.45	4.6	9.48	1/4欠	丸底で外側を縫合へし縫合方向は基本とするベラ側り、内面をナタ調査後、上下方向の1号ガタ調査。
27	石室床面	上細器	杯身	12.5	4.6	-	ほぼ定形	丸底で外側を縫合へし縫合方向は基本とするベラ側り、内面をナタ調査後、上下方向の1号ガタ調査は既存長で文部足となる。
28	石室床面	上細器	小口	(11.9)	(10.9)	-	1/4縫~1縫	半球形の脇部で1/4縫子に開く。縫部を持つ、外表面はハクナ調査(網部は1号目調査)、底部は不定方向、内面は縫合調査。
29	闇口部	縦漉器	杯垂	(11.4)	3.6	-	1/6欠	-
30	闇口部	縦漉器	杯身	(11.2)	3.95	6.9	1/4縫~底部1/2	天井部は縫合へし縫合後未調査、内表面を縫合ナタ調査、外表面に自然軸が観察される。
31	闇口部	縦漉器	杯身	10.9	3.7	-	1/9欠	-
32	闇口部	土器	垂	(4.5)	6.9	-	ほぼ定形	体わざで底部の腹丸、腹部は内外面を縫合ナタ調査。
33	前庭部	縦漉器	杯垂	9.8	4.0	-	1/3	天井部は縫合へし縫合後、既くナタ調査、外表面を縫合ナタで仕上げる。
34	前庭部	縦漉器	杯垂	(11.2)	(4.2)	-	1/4縫	天井部を縫合へし縫合後、既くナタ調査、外表面を縫合ナタで仕上げる。
35	前庭部	縦漉器	杯垂	(12.25)	3.8	-	若干欠	天井部を縫合へし縫合後、外表面を縫合ナタで仕上げる。器壁が厚く無筋なつくり。天井部にハラ先による無孔の跡跡。
36	前庭部	縦漉器	杯垂	12.8	4.2	-	7/8	完

表2 遺物觀察表(2)

No	遺構	種別	器種	法量(cm)			残存			備考
				口縁	底高	底径	口縁	底	裏	
37	前庭部	短芯器	杯身	(107)	3.1	(7.5)	口縁-底	留する立ち上がりを持つ。底部は回転へき剝り、内外面をナメ調整。	口縁-底	
38	前庭部	短芯器	杯身	(104)	4.1	-	1.4	1/2		内側する立ち上がりを持つ。底部は回転へき剝り、内外面をナメ調整。
39	前庭部	短芯器	杯身	10.4	4.4	-	3/4	3/4		内側する立ち上がりを持つ。底部は回転へき剝り、内外面をナメ調整。外側の酒槽が著しい。
40	前庭部	短芯器	高杯	(8.8)	5.1	6.0	1/2	3/4	杯部3/4 脚部1/4	小口径の高脚である。(~)字に開く脚部を持つ。杯は底部を広く貼り付け、その底部で調節で仕上げる。
41	前庭部	短芯器	壺	-	(8.5)	7.5	-	3/4	全体1/3	瓶底片である。丸底で瓶底を回転へき剝し後、ナメ調整し、内外面を回転ナメで仕上げる。
42	前庭部	短芯器	壺(口)	(165)	(52)	-	1/5	-		口縁部の外側、口縁部を外反させてやや丸く肥厚させる。外面は平行タキリ直路、内面に凸と具を踏み凹と具を踏み凹となる。
43	前庭部	短芯器	壺	-	(247)	-	1/5	定	体2/3	口縁部を又く直角である。肩部に最大径を持つ。外面は縱方向の平行タキリ、内面は横心の凸と具を踏み凹と具を踏み凹となる。
44	前庭部	短芯器	壺	(34)	40.6	-	3/4	3/4	瓶5/6	口縁部の外側に折り端部をやや丸めて終える。外面は縱方向の平行タキリ、内面は又く回転へき剝し後、ナメ調整で仕上げる。
45	前庭部	土器部	壺	(218)	(465)	-	1/90	-		口縁部の外側に折り端部を丸く終える。外面は横ハケ、内面は横ハケ調整が観察される。
46	前庭部	土器部	壺	(206)	(545)	-	1/9	-		口縁部の外側に折り端部を丸く終える。外面は横ハケ、内面は横ハケ調整が観察される。
47	前庭部	土器部	壺	(45.1)	(615)	-	若干	-		口縁部を丸く外反し、端部をやや尖らせる。外面を横ハケ調整で仕上げる。内面は又く横ハケで仕上げる。
48	前庭部	短芯器	壺	(261)	(37)	-	若干	天井部 1/2強		天井部が低い側側で、回転タキリ調整する。口縁部は削曲させるもので後ナメ調節で仕上げる。
49	前庭部	短芯器	壺	(260)	(115)	-	1/4	-		天井部が低い側側で、回転タキリ調整する。口縁部は削曲させるもので後ナメ調節で仕上げる。
50	前庭部	土器部	壺(底) 底	-	(27)	(66)	-	1/3	-	底部片で、回転素切り手法。
51	前庭部	土器部	壺(底) 底	-	(17)	6.9	-	底のみ	-	底部片で、回転素切り手法。
52	前庭部	土器部	壺	-	(35)	6.7	欠	ほぼ完存 底部若干	底部-体部下手の割体、回転素切り手法。	

金属製品

No	遺構	種別	器種	法量(cm)				残存	備考
				長	幅	厚さ	重量 (g)		
M1	石室床面	鉄製品	耳環	3.0	3.35	0.8	24.5	完形	
M2	石室床面	鉄製品	鉗頭	(3.2)	1.6	0.2~ 0.3	1.9	欠損	
M3	石室床面	鉄製品	鉗頭	(6.6)	0.7	0.15~ 0.3	4.0	欠損	
M4	石室床面	鉄製品	鉗頭	(6.3)	0.8	0.35~ 0.6	2.8	欠損	
M5	石室床面	鉄製品	鉗頭	(6.9)	0.85	0.3	2.6	欠損	
M6	石室床面	鉄製品	鉗頭	(4.1)	0.9	0.7	5.4	欠損	
M7	石室床面	鉄製品	鉗頭	(12.2)	1.2	0.35~ 0.5	10.1	欠損	
M8	石室床面	鉄製品	鉗頭	5.8	0.7	0.25~ 0.3	2.7	定形	
M9	石室床面	鉄製品	鉗頭	(3.2)	1.1	0.5~ 0.6	1.6	欠損	
M10	石室床面	鉄製品	鉗頭	(3.5)	0.5	0.35	1.0	欠損	
M11	石室床面	鉄製品	刀子	(12.4)	1.35	0.5	15.3	欠損	
M12	石室床面	鉄製品	刀子	(8.1)	1.6	0.4~ 0.45	8.7	欠損	
M13	石室床面	鉄製品	刀子	(6.8)	1.3	0.45~ 0.55	8.7	欠損	
M14	石室床面	鉄製品	刀子	(7.0)	1.3	0.5	7.6	欠損	
M15	石室床面	鉄製品	刀子	(5.2)	1.5	0.2	4.5	欠損	
M16	石室床面	鉄製品	不明	(4.3)	1.7	0.35	4.1	欠損	

# 図 版





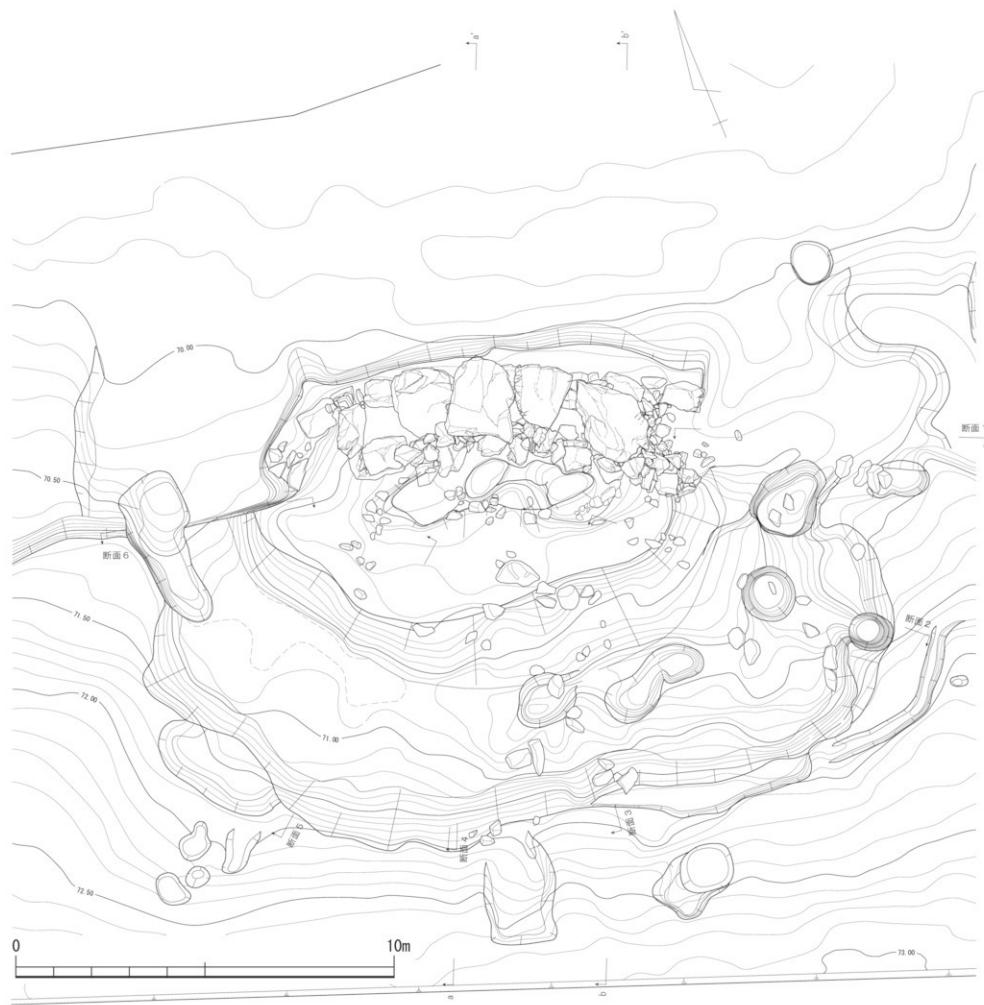
調査区位置図

図版2



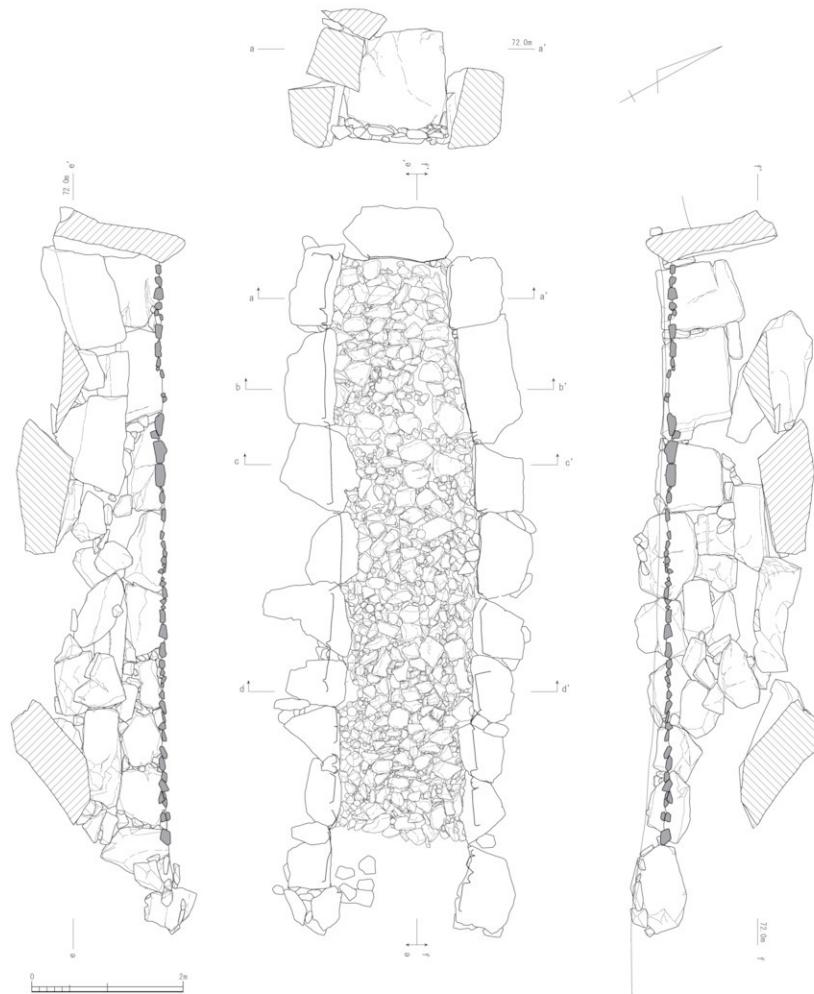
調査区全体図

図版3

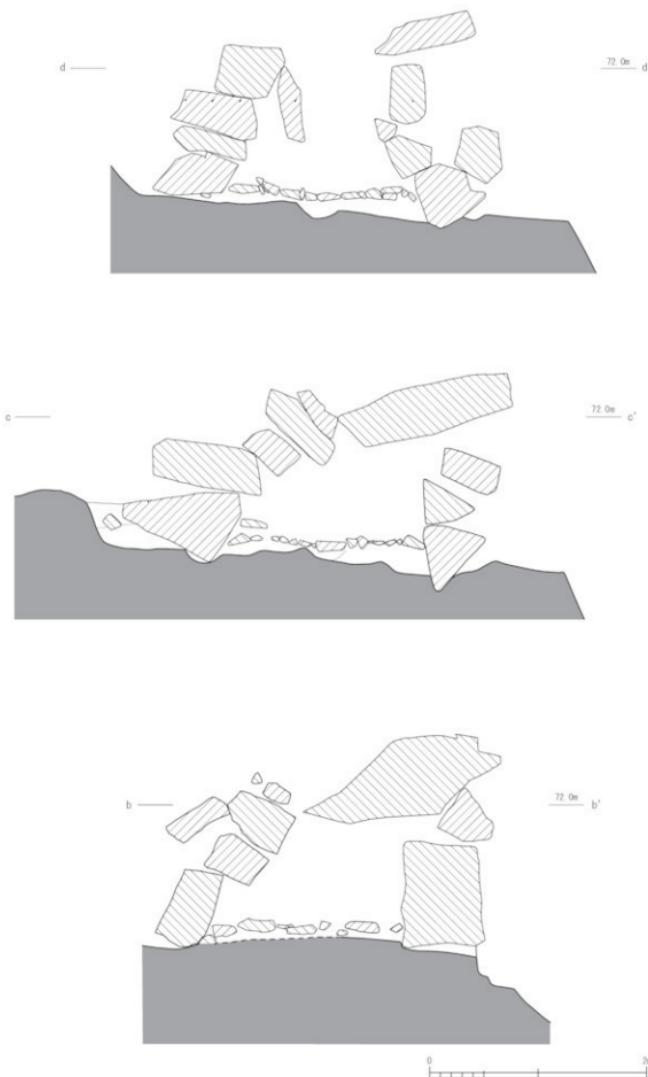


墳丘平面図

図版 4

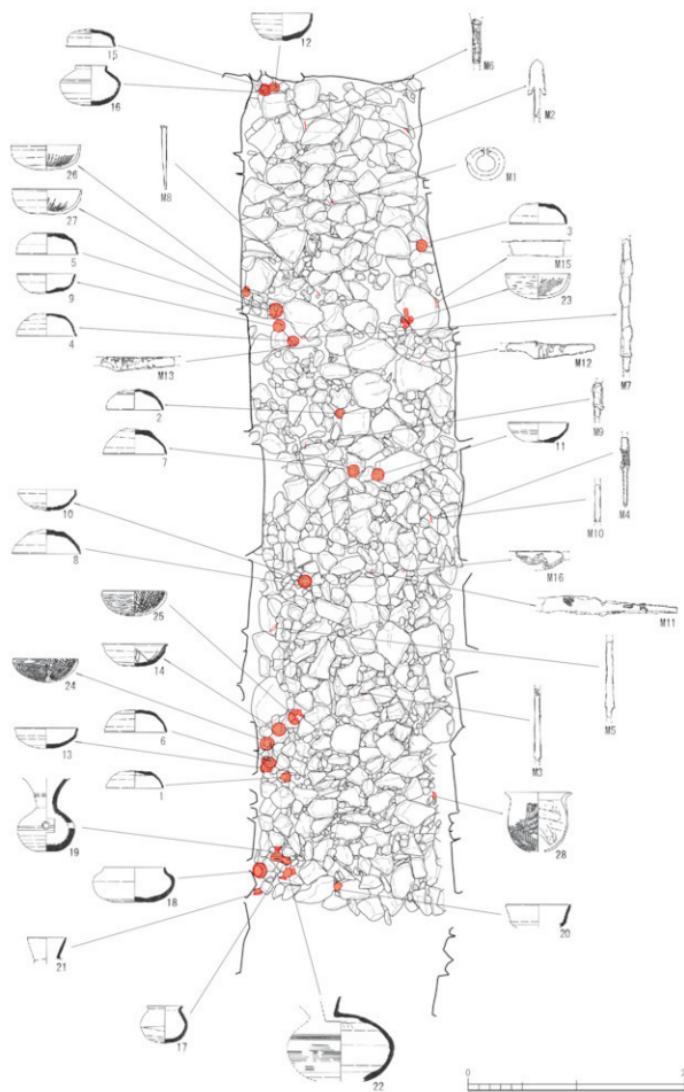


石室平面図・立面図



石室断面図

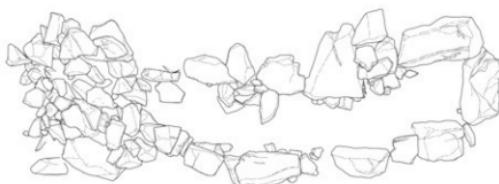
図版6



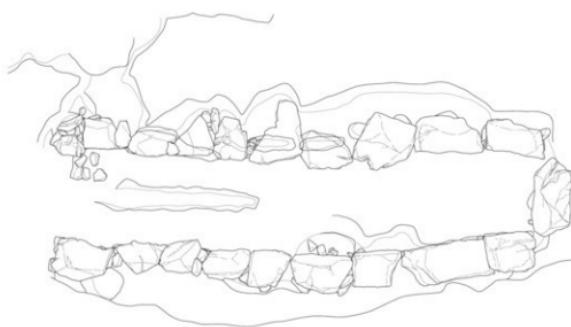
石室遺物出土位置図



天井石配置図



側壁・奥壁配置図

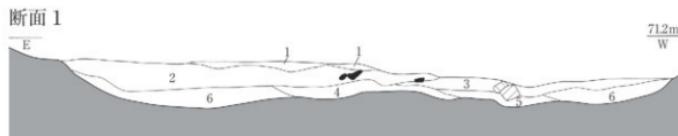


基底石・排水溝平面図

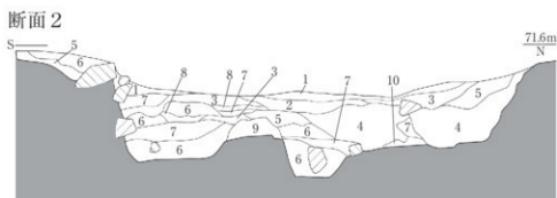


石室構築平面図

図版8

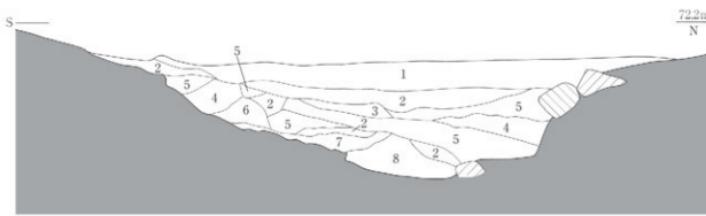


- 1. 10YR 7-6 明黄褐色 働細緻 シート質
- 2. 10YR 2-1 黄褐色 働細緻 シート質 (0.1 ~ 2mmの砂粒を含む)
- 3. 10YR 6-2 = 10YR 7-6 淡黄褐色~明黄褐色 働細緻 シート質
- 4. 10YR 7-6 明黄褐色 働細緻 シート質
- 5. 10YR 6-1 黄褐色 働細緻 シート質
- 6. SY 5-1 オーブ状黒色 働細緻 シート質 (地山黄色シートを少し含む)



- 1. SY 6-4 オーブ状 黃褐色 働細緻~細緻 シート質
- 2. SY 5-2 黄オーブ状 働細緻~細緻 シート質 (地表と地山黄色シートの間にかく覆合した層(木根土層))
- 3. 2Mより黄色シートが大きな塊で混合した層 (木根土層)
- 4. 2Mより黄色シート(地山色)と木根土層の間にかく覆合した層
- 5. SY 5-1 黄色 働細緻~細緻 シート質 (泥引き層を少し含む)
- 6. SY 5-1 黄色 働細緻~細緻 シート質
- 7. SY 5-2 黄オーブ状 働細緻~細緻 シート質
- 8. SY 6-1 オーブ状 黄褐色 働細緻 シート質
- 9. 7G 6-2 黄褐色 働細緻 シート質 (層を含む)

断面3



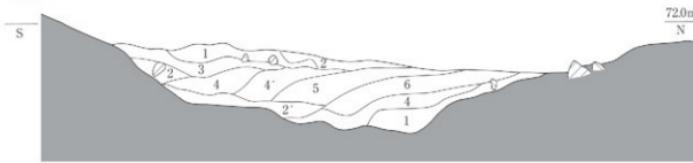
- 1. SY 5-1 黄色 働細緻 シート質上 (0.2 ~ 2mmの砂粒を多く含む/水面10cm)
- 2. SY 5-2 オーブ状 黄褐色 働細緻~細緻 シート質 (0.1 ~ 2mmの砂粒を多く含む/水面10cm)
- 3. SG 5-1 綠褐色 働細緻 シート質上 (0.1 ~ 2mmの砂粒を多く含む)
- 4. 2SY 5-4 黄褐色 働細緻~細緻 シート質上
- 5. SY 5-1 オーブ状 黑色 働細緻~細緻 シート質上
- 6. SY 5-2 黄褐色 働細緻~細�痣 シート質上
- 7. SY 6-1 オーブ状 黑色 働細緻~細緻 シート質上
- 8. 2SY 6-1 オーブ状 黑色 働細緻 シート質上 (0.5 ~ 10cmの砂粒を含む)



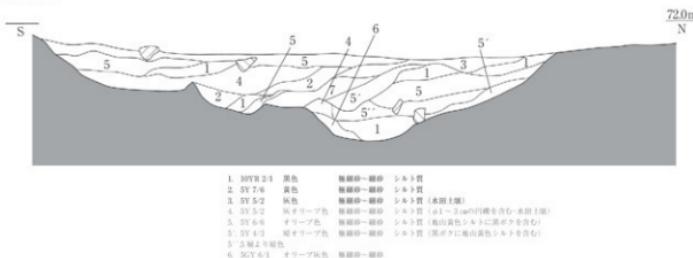
周濠断面図1

図版9

## 断面4



## 断面5

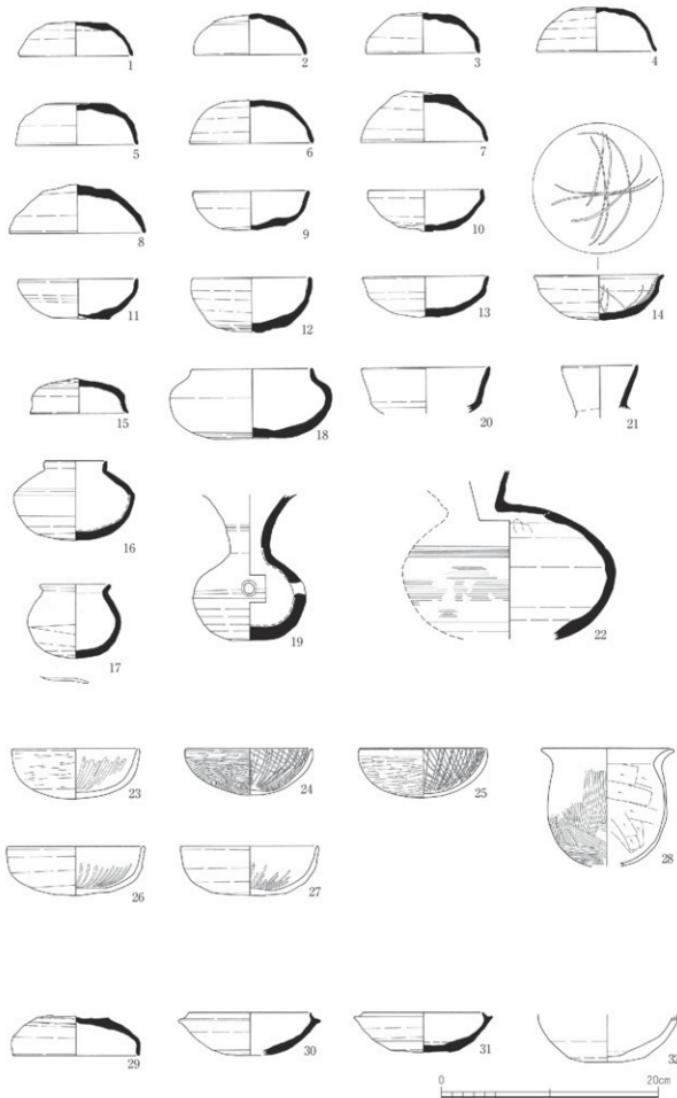


## 断面6

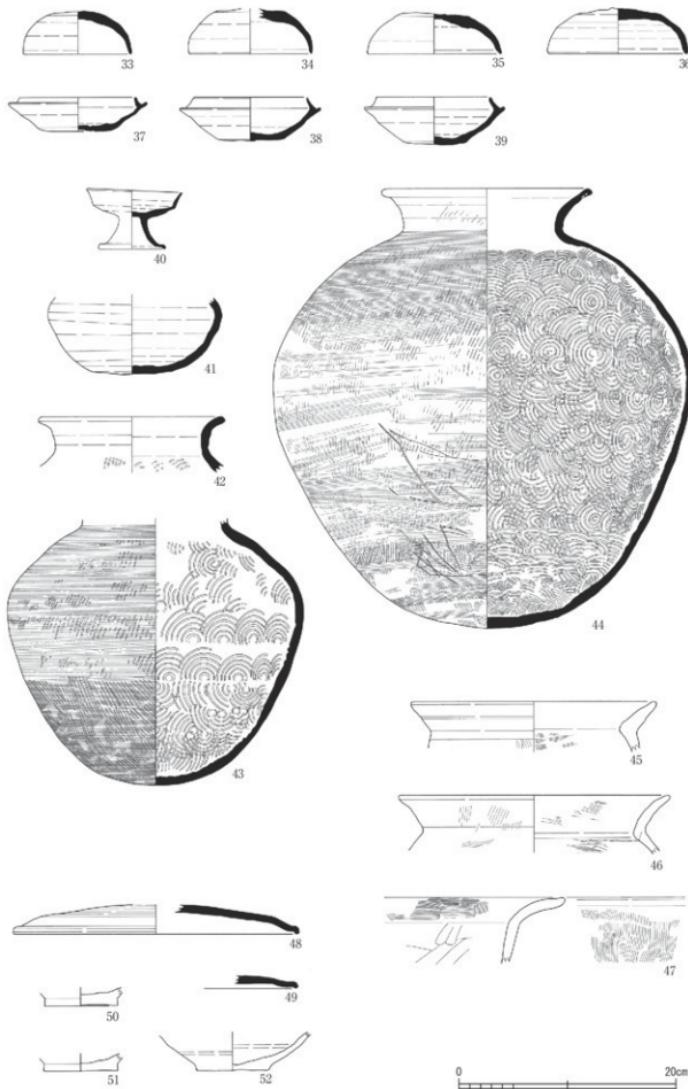


周濠断面図2

図版10

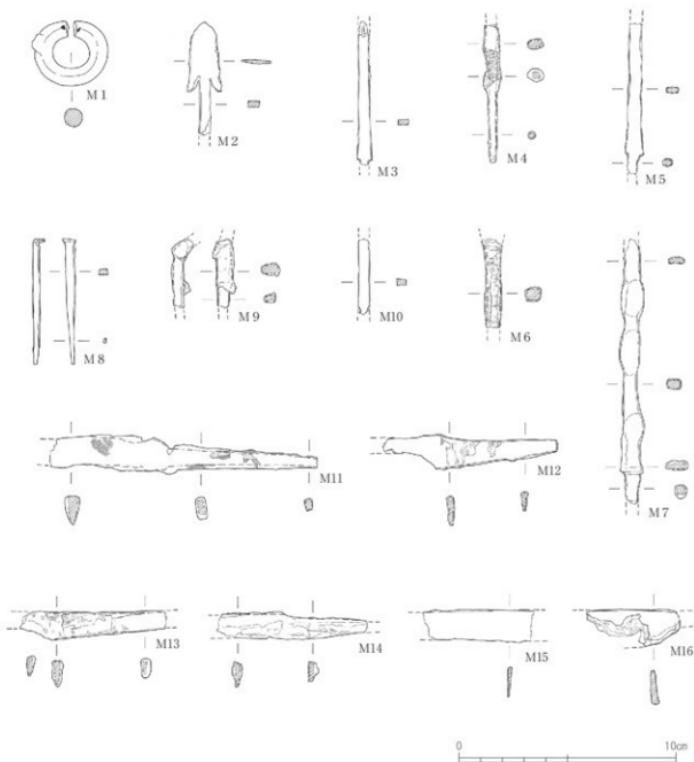


出土遺物 1



出土遺物2

図版12



出土遺物3

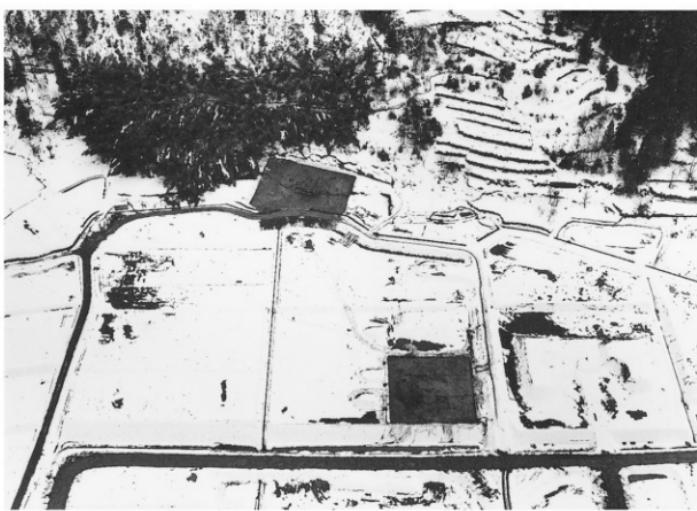
# 写真図版



写真図版 1 遺跡遠景



北上空から



北上空から

写真図版2　遺跡全景1



真上から

写真図版3 遺跡全景2



北から



東から

写真図版4 古墳全景



石室全景(南から)



墳丘全景(南から)



石室全景(東から)



石室全景(北から)



羨門(東から)

写真図版5 墳丘・周濠断面



断面2(南から)



断面3(東から)



断面4(東から)



断面5(東から)



断面6(北から)

## 写真図版6 天井石除去後



石室内状況(北から)



墳丘全景(東から)



石室内状況(東から)



墳丘全景(南東から)



石室内状況(東から)

写真図版7 床面検出後



全景(東から)



近景(東から)



全景(北から)

写真図版8 石室床面



全景(真上から)



奥壁側(北から)



羨門側(北から)

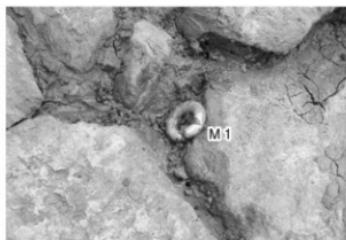


石室北壁(南東から)

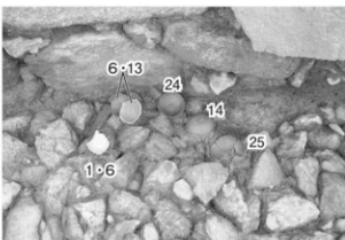


石室南壁(北東から)

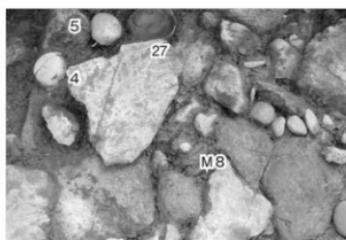
写真図版9 石室内出土遺物



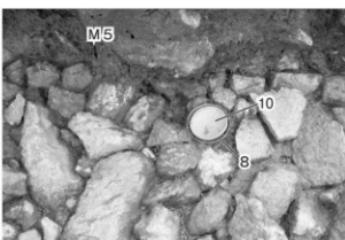
石室内耳環M 1出土状況(東から)



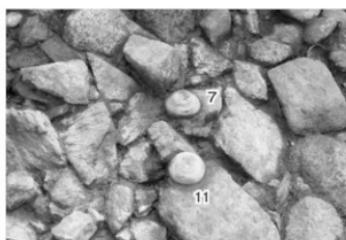
土器1・6・13・14・24・25出土状況(北から)



鉄器M 8・土器4・5・27出土状況(北から)



鉄器M 5・土器8・10出土状況(北から)



土器7・11出土状況(北から)



土器3出土状況(南から)



土器12・15・16出土状況(北から)



土器18・21出土状況(北西から)

写真図版10 碓床除去後



北から



東から



礎床断面  
(東から)

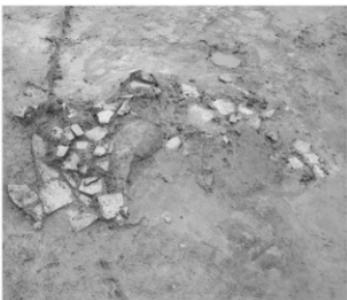
写真図版11 石室撤去後



写真図版12 前庭部・墳丘土留め



前庭部(東から)



前庭部土器出土状況(東から)



墳丘土留め石 南西側(東から)



墳丘土留め石 南東側(西から)

写真図版13 作業風景



周濠掘削



填丘掘削



石室内掘削



石室・天井石実測



前庭部実測



石室内実測



床面清掃



裸床除去

## 写真図版14 天井石撤去作業状況



1 石目撤去作業



1 石目浮き上がる石材



1 石目取り去られる石材



3 石目撤去作業 1



3 石目撤去作業 2



ラフタクレーン



天井石が撤去された石室

写真図版15 石室解体状況



左側壁撤去状況(東から)1



左側壁撤去状況(東から)2



左側壁撤去状況(東から)3



左側壁撤去状況(東から)4



左側壁撤去完了(東から)



右側壁撤去状況(東から)

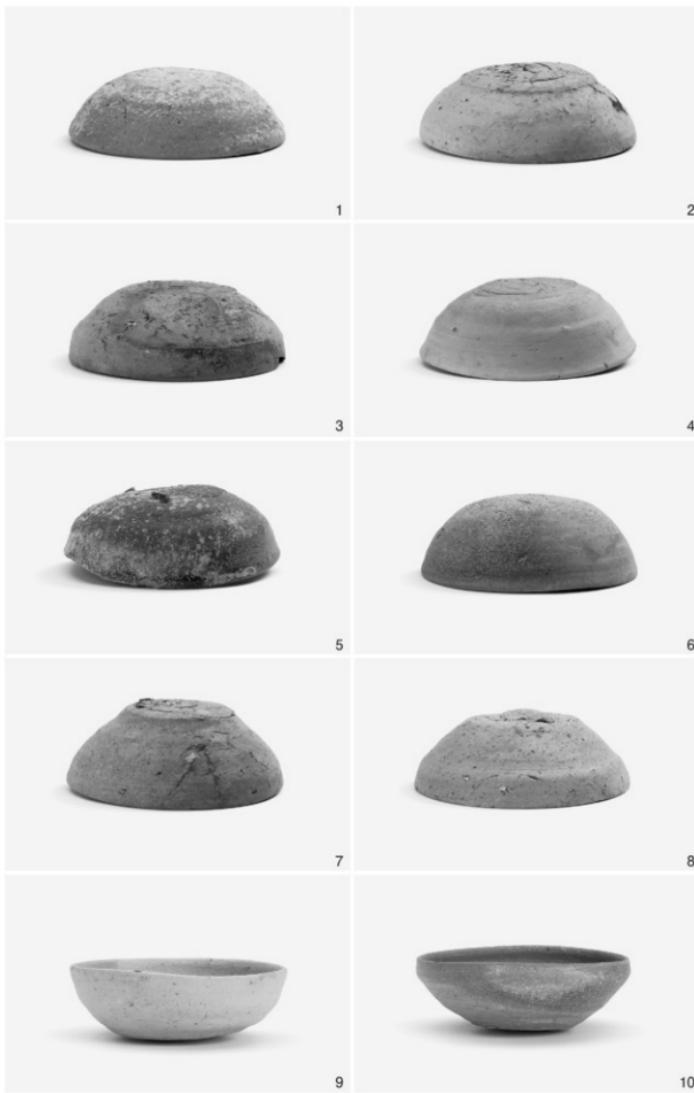


奥壁鏡石据え付け状況(南から)

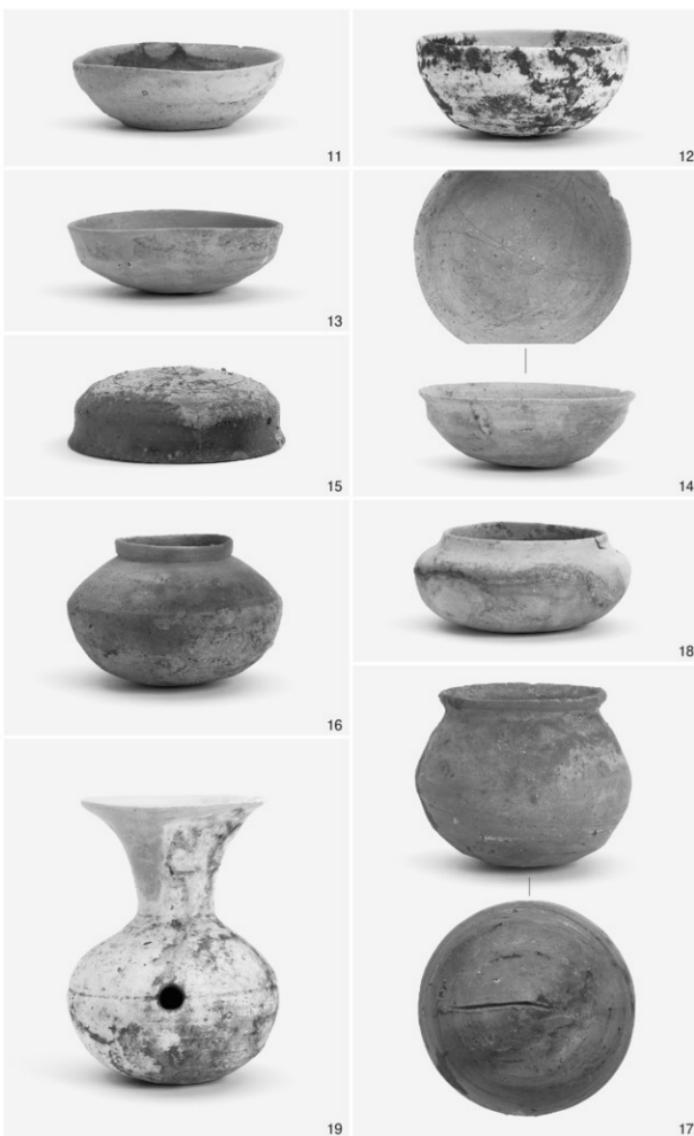


奥壁鏡石撤去状況(東から)

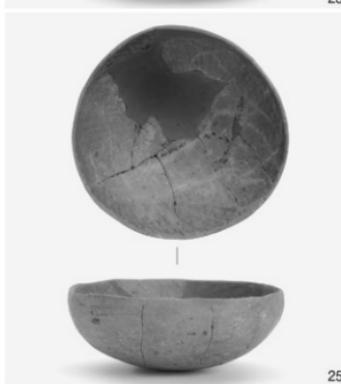
写真図版16 出土遺物 1



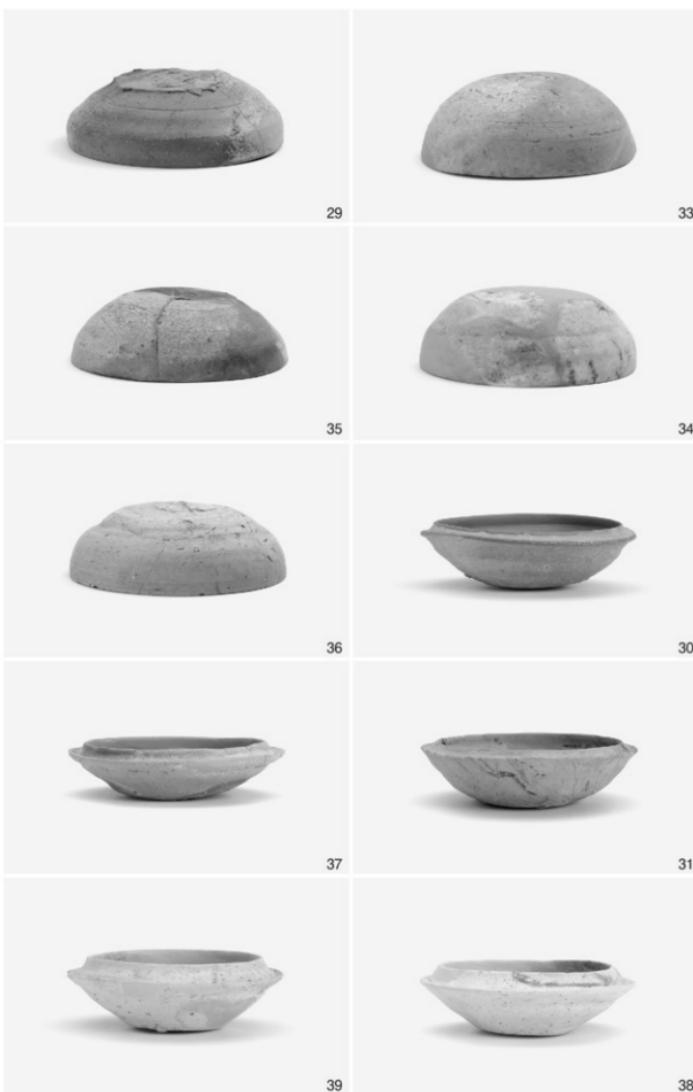
写真図版17 出土遺物2



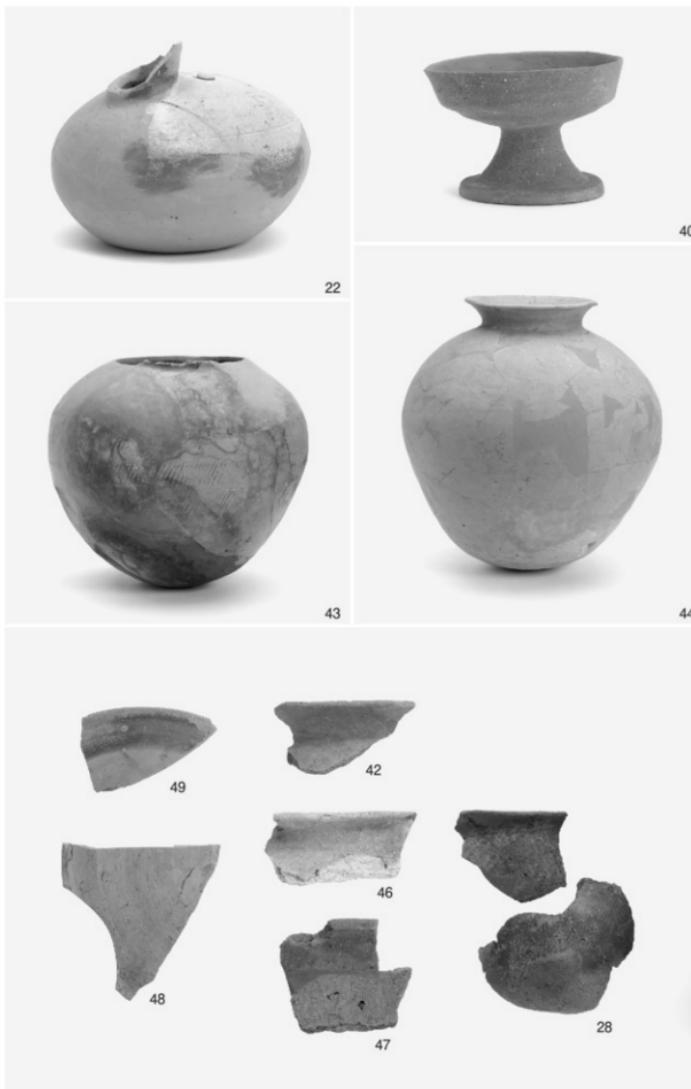
写真図版18 出土遺物3



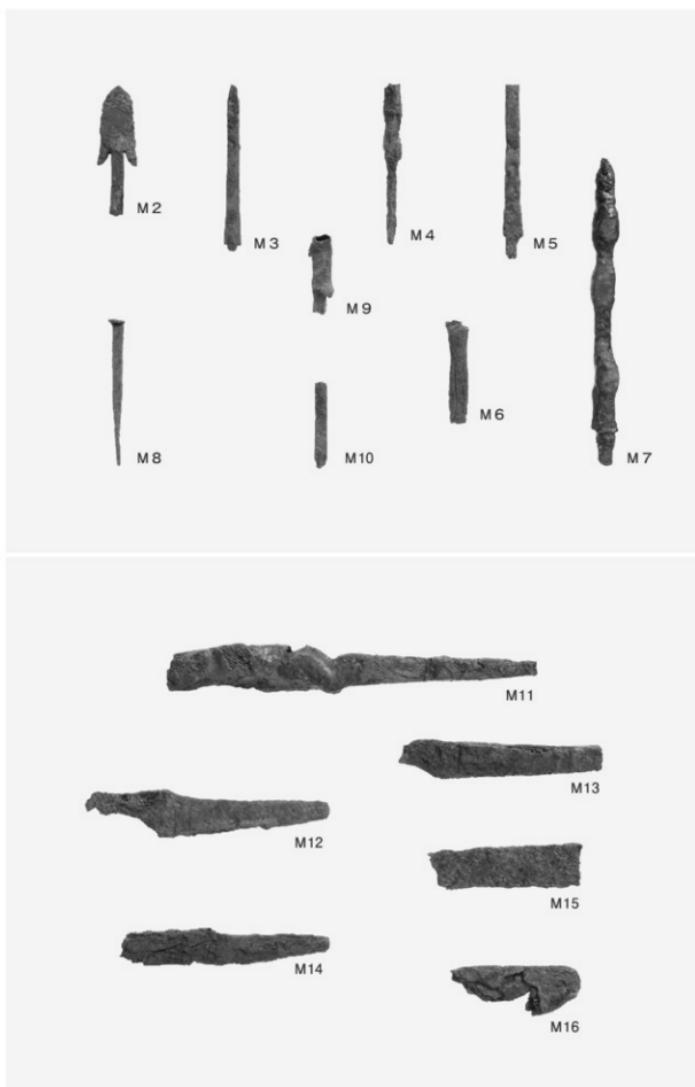
写真図版19 出土遺物 4



写真図版20 出土遺物5



写真図版21 出土遺物6



## 報告書抄録

ふりがな	めいりやまぎわこふん					
書名	米里山跡古墳					
調査名	一般国道483号北近畿豊岡自動車道和田山八鹿道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告					
シリーズ番号	第440冊					
編著者名	山上 雅弘					
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部					
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号（兵庫県立考古博物館内） Tel 079-437-5561					
発行機関	兵庫県教育委員会					
所在地	〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 Tel 078-362-3784					
発行年月日	平成25（2013）年3月22日					
資料保管機関	兵庫県立考古博物館					
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 Tel 079-437-5589					
所取遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
米里山跡古墳	兵庫市八鹿町 米里	28222 680647	34°54'26~43'' 22°5~17'	20071201~20080314 (2007109)	950	記録保存 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
米里山跡古墳	古墳	古墳時代	古墳	土師器・杯・甕 須恵器・杯身・蓋・甕・壺 金属製品・耳環・鉄綱・刀子・釘		
要約	横穴石室構造の円墳1基を調査した。古墳の時期は7世紀前半のもので、石室・石室開口部・前庭部周辺から須恵器杯身・蓋・甕・壺・広口壺・甕・土師器杯・甕・金屬製品耳環・鉄綱・刀子・釘・不明品などが出土している。このほか、古墳周辺には中世以前の粘土探掘坑や、中世後期には水田が開墾され、埴丘を改変したこと明らかになっている。					

\*緯度・経度は平成14年4月1日施行の測量法改正による世界測地系にもとづく値である。

---

兵庫県文化財調査報告 第440冊

養父市

## 米里山際古墳

－一般国道483号北近畿農園自動車道和田山八鹿道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成25年（2013）3月22日 発行

編集 公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号

(兵庫県立考古博物館内)

発行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 菱三印刷株式会社

〒652-0803 兵庫県神戸市兵庫区大開通2丁目2-11

---



24 數T1-026 A 4